

学位論文の要旨

論文題目 (和文) 日中両国漢字に相違意義が生じた原因に関する研究
(英文) The Studies of Which Causes That Make the Same Chinese Character on Chinese and Japanese Have Different Meanings

広島大学大学院総合科学研究科
総合科学専攻
学生番号 D161432
氏名 操 智

日本語における漢字（「和製漢字」を除く）は、元々中国から伝来したものであるが、和語に溶け込むとともに日本語を書き記す文字の一つとなった。このため、日本語における漢字は、中国語における漢字とは異なるもので、「日本漢字」¹と呼ばれるべきである。本研究は日中両国の同一の漢字（「日中漢字」と呼称）に相違意義が生じた原因を究明することを目的とする。

この目的を達成するために、本研究は、現代日中両国の言語でよく使われ、「安」（“安”）・「悔」（“悔”）・「催」（“催”）・「真」（“真”）・「本」（“本”）の五組の日中漢字を取り上げて研究対象とする。

研究方法については、主として通時的な視点で、各時代の辞書、字典や文学作品などから、この五組の日中漢字を調べ、日中共通の漢字の相違意義の由来、及び意義の史的変遷を考察することである。

本論は二つの部分から構成される。第一部分は、この五組の日中漢字の相違意義の史的変遷をたどる。そして第二部分は、第一の部分の調査結果をもとに総括する。

結論としては、日中漢字ペアの間に相違意義が生じた原因は以下の四つのパターンに分けることができる。

①漢字に当てられる和訓と漢字が元々異なる意義が存在することである。つまり日本漢字の中に特有の意義は、この漢字に当てられる和訓（の意義）に遡

¹「日本漢字」という概念は、主に『日本の漢字・中国の漢字』（林四郎・松岡栄志著、東京都：三省堂出版、1995年7月初版、p.82）を参照した。『日本の漢字・中国の漢字』（林四郎・松岡栄志著、東京都：三省堂出版、1995年7月初版）は、日中両国の漢字は異なる概念を持つものとして取り扱われて比較研究する著書である。当書に「中国の漢字は中国語を書き表すためのものであり、日本の漢字は日本語を書き表すためのものである」とある（ibid.p.82）。

る。例えば日本の「安」の「値段がやすい」という特有の意義の起源は、「安」の和訓「ヤス」（「ヤスシ」・「ヤスキ」・「ヤスイ」などの形態を含む）に遡る。

一方、日本漢字と比べると、中国漢字の中に特有の意義も見られる。これらの意義は、殆ど漢字の本義から徐々に派生してきたものである。例えば、中国の“本”の「書物や書籍を数えるのに用いる助数詞」という意義の由来は、本義「草木の根や根元」から派生してきたものである。

②日中両国の言語において漢字の意義の保存や使用が異なることである。例えば、中国の“真”は元々「純粹にそれだけで、混じりものがない」や「全くその状態になる」という意義があった。今日の中国語においては、これらの意義が“純”字に付け加えられている。つまりこれらの意義を表す場合に、“真”の代わりに“純”が多用されている。逆に、現代の日本漢字「真」には前述した二つの意義が残っている。

③古代の日本人が中国漢字の意義を誤訳することによって、日本漢字において特有の意義が生じたことである。例えば、日本の「真」の「ちょうど」という意義の由来は、恐らく当時の日本人は『新撰字鏡』などの辞書や典籍の中の記述を誤訳し、「正」の意義の一つである「ちょうど」を「真」の意義の一つとして取り扱ったことに遡る。

④近世以降、日本の庶民階層が漢字の意義を熟慮せず、同訓に属する他の漢字を借用する傾向があった。また読み方が類似する和語の間に混用されるケースもある。このため、この和語を書き記すための漢字の意義にも影響を与える。

そして日中両国の同一の漢字のそれぞれ意義の史的変遷の中には、以下の二つの方向に導かれる可能性がある。

(A) およそ中世以降、社会や文化の違いによって、日本漢字の意義が中国漢字の意義から徐々に離脱していったことである。近世以降、日本漢字の意義の中に和語や和訓の意義は、更に重要になる。

(B) 中国漢字の意義の中で、本義は一貫して中心的な位置を占めている。派生の意義は殆ど本義に遡ることができる。また後代に新しく生じた意義だとしても、本義との間に関連性が見られる。

本研究は、日中同一の漢字の相違意義が生じた原因（一部分の原因）及び日中漢字の意義の史的変遷が導かれる方向性を解明した。日中両国漢字の意義が生じた原因を研究する上で、一定の示唆を与えると考えられる。